

の習得度の期待値が求められる重回帰式を作成した。

東京都立大学

文学博士

松井 豊 「援助行動における意思決定過程に関する研究—状況対応モデルの提唱—」

援助行動の意思決定過程に関する心理学的モデルを構築することを目的に、一連の検証が行われた。論文は3部から構成されている。

第Ⅰ部（第1章～第4章）では、援助行動の意思決定に関する理論的検討が行われた。まず、援助行動が「自分への外的な報酬や返礼を目的とせず、自発的に行われた、他者に利益をもたらす行動」と定義された後、援助行動に関わる諸概念や研究動向が整理された。

次に、援助行動の意思決定に関わる社会心理学的研究として、援助行動の内的過程に関する研究が紹介された。続いて、援助の意思決定をモデル化した諸研究が整理され、各モデルの特徴やモデル化アプローチの意義が考察された。

以上の検討に基づいて、援助行動の意思決定過程に関する仮説的モデルが提示された。この仮説的モデルは、援助を要請される事態に遭遇した人が援助か非援助かを決定するまでに、その人に生じる内的過程を、4つの側面に分けてモデル化している。

第Ⅱ部（第5章～第10章）においては、実験や調査によって、この理論モデルの妥当性に関する検証が行われた。

第5章では、援助要請状況のビデオ映像を観察する実験が実施され、援助行動の意思決定における「事態への注意」と「共感」の役割が分析された。第6章では想定場面法による質問紙調査によって、「事態の重大性の評価」が分析された。第7章でも想定場面法が用いられ、様々な援助場面における援助意図に関する個人差のパターンが、POSA (Partial Ordered Scalogram Analysis) によって解析された。

第8章では、質問紙調査を用いてプロトコル分析に類似した分析が実施された。第8章における2つの調査結果から、援助行動の意思決定において生じる意識は、援助状況によって異なることが明らかにされた。この結果から、上記の理論モデルは状況に対応させて改定される必要があると考察された。

第9章においては、マイクロコンピュータを用いた情報モニタリング法が実施され、援助状況における意思決定者の情報探索過程が分析された。情報選択肢の検索率や検索順序の分析結果から、意思決定において生じる認知的過程は状況によって異なり、各過程の生起には一定の時間的順序性があることが明らかにされた。

第10章では、390名の大学生を対象にして質問紙調査が実施され、数量化理論第Ⅲ類による解析の結果、援助状況が4種の類型に分類されることが明らかになった。

以上の理論的検討及び実証的検討の結果に基づいて、「援助行動の意思決定過程に関する状況対応モデル (situational contingency model on helping behavior decision making)」が提唱された。このモデルは、援助状況における意思決定を5つの側面に分け、各側面の内容が援助状況の4つの類型によって異なると理論化している。5つの側面とは、「1次的認知処理」「感情過程」「規範的責務感」「2次的認知分析」「行動意図」である。4つの状況類型は「日常的な援助」「寄付・募金」「自発的な奉仕」「緊急事態の援助」である。各側面内の内的過程の順序性や側面間の関係は、第Ⅱ部の実証研究の成果に立脚して、フローチャートの形式で、状況類型毎に図示されている。最後に、このモデルの理論的位置づけや、道德教育に対する意義などが考察された。

名古屋大学

教育学博士

二宮克美 「幼児・児童の道德的判断の発達に関する研究」

本論文の主眼は、Piaget (1932) の提起した客観的責任判断から主観的責任判断へという発達過程を、意図の認知が果たしている役割に着目して明らかにすることである。とともに、意図の使用の観点から道德的判断の発達過程を細かく記述した Gutkin の4段階説を、意図の認知の側面から吟味し直し、意図の使用のみならず意図の認知の要因を加味して道德的判断の発達過程を記述し、その適用範囲の拡張を試みることである。

第1章「研究の背景：幼児・児童の道德的判断に関する研究の概観」では、Piaget の研究の概要とその追試的研究、道德的判断の発達のメカニズムを明らかにしようとした研究、発達過程を細かく記述しようとした研究、道德的判断の発達に関連する諸要因を検討した研究などの枠組みから先行研究を概観し、本研究の背景を詳述するとともに、問題点を浮き彫りにした。

第2章「問題および目的」では、第1章の研究展望をふまえ、本論文の目的と課題を設定した。そして、本論文を①幼児・児童の道德的判断における意図の認知の役割の明示、②幼児・児童の道德的判断の発達過程の吟味、③意図の使用のみならず意図の認知の観点を加味して記述した発達過程の適用範囲の拡張、の3つのステップで構成することとした。

第3章「幼児・児童の道德的判断における意図の認知の役割について」は、本論文の第1ステップにあたり、第1の課題として、道德的判断の研究パラダイムとは異

なる課題で、意図の認知能力を測定する方法を探り、主観的責任判断ができない者の中には、意図を認知している者と認知していない者という2つのタイプが存在することを示した(実験Ⅰ)。第2課題として、意図の認知の役割を明らかにするために、モデリングの手続を用いて道徳的判断の変化を引き起こし、検討を加えた。その結果、意図を認知している者の方がモデリングの効果をj受けて主観的責任判断ができるようになること(実験Ⅱ)、意図を認知していない者に対しても、意図に着目しやすい状況を設定すれば、主観的責任判断ができるようになること(実験Ⅲ)を明らかにした。以上の結果から、幼児・児童の道徳的判断の発達には意図の認知という要因が重要な役割を果たしていることを明示した。

第4章「幼児・児童の道徳的判断の発達過程の検討—Gutkinの4段階説の吟味を通して—」は、本論文の第2ステップで、意図の使用のみならず意図の認知という側面を加味して、道徳的判断の発達過程を解釈し直すという第3課題を設定し、Gutkinの4段階説を追試・検討する中で、道徳的判断の発達過程を記述し直した(実験Ⅳ・実験Ⅴ・実験Ⅵ)。さらに、道徳的判断の査定方法に関する2つの問題(具体的には、意図と結果の情報提示順序の効果ならびに例話中の主人公の自他の影響)について検討を加え、新たに記述した発達過程の意義を確認するという第4課題を設定し、意図の認知水準の観点からそれぞれ解釈を試みた(実験Ⅶ・実験Ⅷ)。

第5章「幼児・児童の道徳的判断の発達過程の適用範囲の拡張」は、本論文の第3ステップであり、第5課題として、「過失」のみならず「嘘」や「盗み」の主題でも、先の発達過程が見られるのかを検討し、この3つの主題における道徳的判断の発達同時性を吟味した(実験Ⅸ・実験Ⅹ・実験Ⅺ)。さらに第6課題として、道徳的判断とは幾分異なる「親切さ」の判断にも、この発達過程が拡張できるかを吟味した(実験Ⅻ・実験Ⅼ)。

第6章「総括的討論」では、本論文で実施した13の実験で得られた結果の整理を行い、これらの実験結果に基づき、幼児・児童の道徳的判断の発達過程、道徳的判断に及ぼすモデリングの効果、道徳的判断の発達と法的・社会的判断との関連などについて、全体的な討論を行った。この討論をふまえ、結果の認知→意図の認知→意図と結果の重みづけ→意図の重視という発達の大きな流れを記述した。最後に、本論文で得られた諸結果から、道徳教育への若干の提言を行った。

京都大学

教育学博士

柏原恵龍 「知的処理過程の神経心理学的研究」

神経心理学を Hecaen は、高次な精神活動を脳の構造

との関連において研究する科学である、と定義しているが、本研究では知的処理の過程を、左右の半球との関連で検討した。

情報処理の過程は3段階に分けられるが、その最初の段階である感覚記憶は、意味の分析を受けないままの大量の情報を保持するといわれている。文字刺激は通常言語刺激とみなされるが、形のあることから非言語的な成分をも持っている。そこで3×3の平仮名の行列を瞬間提示して、その部分報告と全体報告の差から感覚記憶の左右差をみた。報告数は左視野よりも右視野の方が多かった。これは刺激が読みを持つ文字であれば、右視野のイコノは言語化されやすく、短期記憶に転送されやすいので、左半球優位となったものと考えられる。次に短期記憶の水準で知的過程の左右差を見るために、文字の読みと形の大きさの組合わせで4種類の文字刺激を作り、左右の視野に瞬間提示して反応時間を求めた。大きさと読みの矛盾する刺激の場合、左右の半球で同時二重乖離を示しうることがわかった。Weinskrantz, et al. (1974) は、意識に反映されない視覚過程で“まる”と“かけ”の判断が可能であることを見出している。Gazzaniga & Sperry (1966) は、右と左の半球で同時に独立に明暗と色彩の判断の可能であることを示している。健常者の左右の半球は脳梁繊維で緊密に結合しているが、これは逆にみるともともと分離していることを意味する。そこで右視野に文字刺激を提示して右手で、左視野に図形刺激を提示して左手で同時に反応させたところ、刺激が逆の場合よりも速い反応時間が得られた。これは刺激と反応を脳の機能に対応させると、健常者でも並列的な知的処理の可能なことを示している。

Levy (1969) は知能検査での研究結果から、右半球にも言語を持つ左利きの場合、言語による干渉を受けて非言語的な知的処理能力が低くなると考えた。もしこれが正しければ、時間的な制約が少ないので高次な知的処理過程を扱う有力な手段となる。そこで集団式知能検査を用い、個人内で言語能力と非言語能力の相対的な比を求めて比較した。男性ほど側性化の明瞭でないと言われている女性では、言語能力が高く非言語能力が低かったものの、左利きではその傾向は顕著な形では認められなかった。側性化の程度を、右利き一左利き群間それに男一女群間で、文字の形と読みの矛盾する前述の刺激を用いて確かめたところ、性別よりも利き手の違いのほうが左右差には大きく関与した。これは、非言語能力によって側性化の程度を推測することの効率が良くないことを示しており、言語機能と非言語機能の間に推測された競合関係は、対象が言語化されてしまうと非言語的な側面に注意が払われにくくなるために生じたものと考えること